

2024. 9. 2 トンボという素材を通した多様で自由な遊び方の保障

この日は朝からトンボの羽を付けた実習生さんが年長保育室にたくさんいました。

朝子供たちが登園してくると「先生！ちょうちょみたい！」「えっ、トンボだよ！」「じゃあ、チョウトンボ？」「あ、それ本当にいるんだよね！」などいろいろな会話が聞かれます。トンボのことでもっとたくさんの子がわくわくしてほしいという実習生さんたちの思いが実を結んでいます。

トンボについての掲示を見ながら、M子は「シオカラトンボって大きくなったら白くなるんだって！そして白いののは雄なんだって！じゃあ、そのトンボはどうか？」と大きな虫かごをチェックしに行きます。「あ！白くなってる！これは大人のオスだ！」とM子。さらには、「トンボっておしっこかうんちはするのかな？」とM子はつぶやきます。知った情報や気付いたことをすぐに現物で確認できる環境の大切さを感じると同時に、だからこそまた違った新たな問いが湧いてくるんだなと感じます。

その横では、トンボの衣装作りが始まりました。大きく切り取った羽を持ち、「羽に模様付けたいな！」「ダイヤつけよ！」と思い思いに羽にデコレーションしていきます。そこでは、テープが外から見えないようにクルッと丸めてつけていたり、羽が左右対称になるように調整したりと年長らしいこだわりも見えてきます。出来上がった羽を背中につけ、カラーポリで服も作ると、M子とY子、S子はそれを着て昨日のカフェの続きを始めました。すると、S子が「ここはトンボカフェだね！トンボの洋服を着た人がお店の人をすることができるんだよ！」と言います。昨日までの普通のカフェが「トンボカフェ」として進化していきます。カフェには年少、年中児も含め、いろいろなお客さんがやってきました。教師もお客さんとしてカフェに招待されると、メニュー表を渡されます。「やきりんごとタピオカジュースをお願いします」と注文しました。お店の人は「はい、お待ちください！」と用意を始めます。飲み物はその場でカップに注ぐスタイルです。そこには子供たちなりのリアリティも感じます。教師は「トンボクッキーとかってあるんですか？」と聞いてみます。すると、「あ！ちょっと待っててください！」と言い、急いで折り紙を取りに行くと、それを四角に折り、真ん中にトンボの絵を描いて「お待たせしました！」と出してきました。さらには四角の空き箱にトンボマークを付けてトンボケーキも出来上がります。部屋の反対側では他の女兒らでかき氷やさんが展開されていますが、そこのお店の子たちもお客さんでやってきます。また遊びを超えていろいろな刺激をもらったり、つながっていったりするかもしれません。

園庭では、トンボを捕まえようと奮闘している子供たち。昨日は年長女児が一人で7～8匹トンボを捕まえました。ただ網を持って走り回るのではなく、これまでの経験からトンボが近づいた瞬間にもものすごいスピードで網を振りかざすというように、動きに無駄がありません。昨日みんなの時間の時に話が出ていたそのやり方を、覚えていたのかどうかはわかりませんが、F男とY男、I男が砂場で網を持って石のようにじっとしています。何をしているのか聞くと、「止まり作戦中」と言います。じっとしていると、自分の周りにトンボが周回してくるようで、自分の前にきた瞬間を網でとらえるという作戦。「みんな静かにして！」秋の風に吹かれながら、子供たちの周りをトンボがすいすい飛んでいます。そして見事にトンボを捕まえていく姿が見られました。さらには、トノサマバッタ、ショウリョウバッタも捕まえることができ、大きな虫かごにトンボ共に入れていく。I男は「ショウリョウバッタのお腹がピンクだよ！」とバッタに対する興味も広がっている感じでした。

保育室の大きな虫かごを見ながら、A男とH男は「トンボのおうちをもっとよくしたいな！」とつぶやきます。教師が「どうやって？」と聞くと、「下は床じゃなくて、ふわふわの芝生とか本物の草と敷いたらどう？」「あ！空もあったらいいよね！先生、青の色画用紙と黒の画用紙、あと赤と白の画用紙も必要！」と言いに来ます。一緒に教材庫に取りに行くと、「朝と夜を作ろう！」と二人は作業を始めます。H男は「雲をたくさん切ったら、鱗

雲になったよ！」と言います。「夜は星と月もあるといいかな？」子供たちなりの発想で、トンボの気持ちを想像しながら、トンボの世界を作ろうとしている姿が素敵でした。できた空を虫かごの上に置き、下から覗き込みます。トンボからの見え方を気にしているのでしょう。

夏休み明け3日目から続いているトンボストーリー。一部の男の子で展開されていたものが、遊びを超え、材を自分なりに工夫しながら、それぞれの場所、関わり方で広がっています。そこには、教師の思いと願いが込められた環境づくり、さらには教師の想像をはるかに超えてくる子供たちの創造力、発想力。そして、そこに再度子供たちの思いに共感しながら寄り添っていく教師の関わりと支援が大切なのかもしれません。遊びがより豊かな体験となっていくためには、子供の主体性と教師の意図性のバランスはもちろん大切ですが、遊びと遊びの距離感、タイミング、そしてトンボという素材を通した多様で自由な遊び方の保障。それが、トンボを「好き」になることにつながり、またさらにはトンボの世界からさらなる外の世界への架け橋になっていくようにも思えました。

